

誤解はあった方がいいですよ、  
音楽って——高橋幸宏

『BROADCAST FROM HEAVEN』

品川駅から海手に向かって車で10分ほど走る。いつしかそこはかかない潮の香りを鼻腔が感じ始めると、そこに見えてくる大きな建物……それが寺田倉庫だ。ニュー・アルバム『BROADCAST FROM HEAVEN』をリリースしたばかりの高橋幸宏を、この倉庫の5階にあるスタジオ・テラへ訪ねた。折りからの花粉症ブームに心ならずも便乗(?)してしまっただけが、ティッシュを傍らに置きつつ語る言葉に耳を傾けよう。

S

●アルバムも14作目となると、鮮度を保つためにいろいろ工夫せざるを得なくなると聞きますが、このアルバムではその辺をどういった形でクリアしているんですか？ それに対する苦勞はあったんでしょうか。

○前作ではいろいろ考えたんですけども、今回は私小説的な部分を除いちゃって、ポップな、ジョークっぽいものをやろうと思ってたんですよ、レコーディングに入る半年くらい前までは。けどミカバンドで、わりとそういうことができたというのがあったから。終わったあと「あ、またこれで自分の好きなものをやるな」という。そういう点では気楽にやれましたね。

●作詞陣に鈴木慶一さんや森雪之丞さん、それにステューヴ・ジャンセンなどを起用していますが、最初からこの人たちでいこうと決めていたんですか？

○ええ、考えてました今回は。森君にはミカバンドからの付き合いで1曲だけやってもらおうと思ってまして、慶一に関しては日本語の曲は彼中心でやりたいなと。で、自分で書くのは「リハビリテーション」1曲でいいやというのを最初から決めてました。彼らの目を通して見た高橋幸宏って……まあ慶一とはビートニクスからの付き合いがあるし、彼の日本語の詞がとてもしっかり好きだし、自分で書くより自分っぽい詞になったりしますんで。

●曲先・詞先でいったら、どちらになるんですか？

○慶一との場合は一緒に作ったものもあるんで、それはまあ問題ないんですが、そうじゃない場合はある程度「こういう曲ができたから」という……曲先が多かったですね。ただ歌詞が英語の場合は逆に詞先が多くて「こういう詞を書いて欲しい」とか、まあ、ステューヴ・ジャンセンのはだいい前に書いてもらったもので、いつか曲にしようと思っていたものだったんですけど。

●車のコマーシャルのバックに流れた「FAIT ACCOMPLI」のことはですか？

○ええ。

●アルバム全体から見ると、あの曲だけちょっと曲調が違ったのは、コマーシャルでの使用を前提にして作られたから？

○一応そうです。ただ、ああいう曲がアルバムの中に、典型的な僕の昔からのスタイルの曲ですけれども、一曲あった方がいいなとは思ってたんで、何曲目を持ってくるかちょっと悩んだだけで。

●あの曲の歌詞はかなり哲学的で理解するのに骨が折れますが、あなたがステューヴにああいった歌詞を書かせた……？

○いや、むしろステューヴが考えた僕でし

ね、あれ。というか一緒にコラボレーションを作った時のスタイルとかね、あと自分のドルフィンの方のスタイルとほぼ共通しているところがあるけど、僕を意識して書いているところがありましたね。

●それにしても難解な歌詞ですよな。

○いつもそうです。あのイギリス人たちはああいう感じ(笑)、日本の連中とか。若いもんですから……ついで(笑)。

●あなたの口からあの歌詞「僕は猛禽類のように部屋の中をうろついている」から、最後に「FAIT ACCOMPLI=既成事実」で締めくくるあたりの意味を解説してほしいんですか。

○あの最後のところで彼は「やった！」と思ったんでしょうね(笑)。「いい言葉がでた！」っていう風に。でも抽象的ですよ。ステューヴのあのロマンティズム……例えば「沈黙が僕の周りですごく鳴っている」とか、ああいうのって独特なんです。以前に作った曲にもそういうタッチが多々あるんですけども。日本語でもああいう抽象的な気取り方ってあるでしょ。それをまあ露骨に、グルーミーさ……言葉でこれは解説できないって感じてやるのが、彼らの今のところのスタイルですね。

●それと対象的に鈴木慶一さんの歌詞の方は、その気持ちわかるな……みたいなものが多いんですか。

○彼は日本人の中では難解な詞を書く方ですけども、最近特に慶一の詞が良くてね。わかりやすく、しかも奥が深いって感じに変わってきたんですよ。昔はただ「ものは壊れる人は死ぬ」の世界で「3つ数えて目をつぶれ」の世界でしたけど(笑)。あの辺も好きだったんですけど、ただ根底にいつも流れているのは、独特の絶望感とそして秘かな希望なんです。僕とすごく似て。どっかですごくネガティブでありながらも、でもポジティブにならなきゃいけないっていう姿勢があっただけ。

●このアルバムはメロディと歌詞がこれまでも増してロマンティックで、思わず切なくなるような作品が多いように感じんですが、それは意図的にそうしたわけ？

○いや、そうなんじゃないですよ(笑)僕もいつも。ただそれがうまくとまらないう、前作のようにプロデューサー不在アルバムみたいになっちゃってね。自分でも何がやりたいんだかよくわかんなくなってしまうんですけど、今回はそれがなかったですから……自分をわりと素直に出すとああいう感じだったという。

●以前はずいぶん先鋭的な部分を前面に打ち出したこともありましたね。例えばYMOの頃なんかも。

○ええ、一般的にはユキヒロ=叙情性みたいな捉え方をされることが多かったんですが、『テクノデリック』や『BGM』あたりを振り返ると一番変わってきたことをやっているのは自分だったりして(笑)。

●『BGM』の中のあなたの曲は、かなり恐い感じがしましたよね……

○もう、ビビリでしたよな。今にも死んじゃいそう(笑)。

●ところで、今回のアルバムのためには何曲くらい用意されたんですか？

○今回は捨てた曲はほとんどないです。前のアルバムでは一杯あったんですけども、今回は例えば「1%の幸福」を最初にシングル用に作って、B面にたまたまコマーシャルで使うという話もあって「FAIT ACCOMPLI」ができて、さあアルバム作りに入ろうという時にテーマにあったのが「リハビリテーション」だったんですよ。それで今度は慶一とのコラボレーションを何曲かやろうってんで「6,000,000,000の天国」と「4:30のイエティ」を作った。本当はそのあとロンドンへ行くはずだったけれど伊豆に籠って、詞先であったクリス・モスデルの曲とかを作った……で、これ全部うまく埋めていけばいいなあと考えて、あとは何がたりないかな……たりないものを作っていくという作業だったんで逆に曲を捨てる必要がほとんどなかったですね。

●完成した形があらかじめ見えていた。

○だいたいそうですね、今回は。アルバムのコンセプトとしては、出だしのインストがあって「6,000,000,000の天国」があって、つまり表題の曲になるようなインスト……抽象的な曲があり、掴みどころのないような曲を次に持ってきたかったんですよ。その2曲があって終わりに「リハビリテーション」を持ってきて、まあ最後はバラックの曲をやりたいっていうのが決まっていたんで。間の曲はできるだけ散りばめて、だから最初の2曲と最後の2曲で言いたいことは言っちゃってるんですよ(笑)。

●ヴォーカリストとしては満足できるアルバムになりましたか？

○自分しか気にならないところっていうのが、ヴォーカリストにはあるもので……気にしないタイプの人もいますけど、僕は年々神経質になってるんですよ。あまりいいことじゃないのかもしれないけど、ありますね気になるところはまだ。自分しかわかんないみたいだけど、人に言ってもわかってもらえないんで。毎日毎日やり直すもんだから……みんなにイヤな顔されながらも(笑)、結構時間かかりました。

●昔からあなたの歌は、どこでかかっているも、例え遠くでかかっているもすぐにわかる……みたいなところがありましたよね。

○わかるみたいですね。真似する人がいないっていうのが不思議だなんて思って(笑)。何何風ってあるでしょ、例えば(山下)達郎が出てきた時は達郎風っていうように。今でもそれっぽくて、それなりに売れている人はいるし……だから「早く出てこないかな～」と思っているんですけど、出てこないですね。

●真似できないんじゃないですかね……

○のたち唱法(笑)と言われてますけども、トノパン(加藤和彦)には、1個の音程にいくまで3回くらい音程が変わりながらどり着くという(笑)。「ラ～」って出す時に「ラ……ア」って出す歌い方だから。英語でも日本語でもそんなんですよ、僕(笑)。

●このアルバムは、特に前作と比べるとずいぶん聴き手のレベルまで下がってくれたなという感じがするんですけど……

○というかな、簡単に言うプロデューサーがちゃんという感じのアルバムなんです。今回は。前作は何かたど作っちゃっただけ……しかもすごい苦しんでいるのが見えて。だ

から自分では1度もレベルをマスの中に対応させていくという作業はしたことはないし、マスから自分が離れよう逃げようとしたこともないんですよ。例えば前衛を気取ったりアンチになつたりしてマスを捨てることはできるんですけど、それをやったのは「BGM」のころ……YMOというグループの中だけでしたね。

●本誌4月号のレコード評に、このアルバムをバックに流しつづ女の子を口説くとい……というようなことが書いてあったんですが、作った方としてはどうですか？ 確かに優しい雰囲気か漂いそうなアルバムですが。

○うん。まあそれも一種の誤解なんだろうけども、誤解はあった方がいいですよ音楽って。でも「6,000,000,000の天国」なんて僕にしては珍しく歌っている内容がね、例えば社会問題とか環境問題とか宗教問題とか多分に混入しているわけで、僕にとっては今まで極力避けてきたものなんです。慶一は昔からそういうところがあつたけれど「誰かがキリストに向かって石を投げられるか」というような内容をね、自分ではあまり歌ったことはなかったですから。でも今はそういうことをやってもいいなっていう気分なんです。

●サウンドの面からだけで捉えると、見逃してしまう部分があるという……

○そうですね、この間そういう風に言っていた人がいましたよ。3回くらい聴いてみたら恐ろしいことを言ってるアルバムなんだな(笑)ということがわかったって。そういうことって結構大切ですよ。僕がプロデュースしていた高野(寛)なんかも今のアルバムはよく売れているけど、よく歌詞を読んでみると結構すごいもんね。全部ラヴ・ソングに聴こえるんですけど、1曲くらいしかないと、彼の詞なんかも。「これをこういう風に誤解するんだろうな」とどの程度彼が計算して作っているのかは知らないけれど、そういう部分はやっぱりあった方が聴き手の幅は広がるでしょうね。

●昨年発表された細野さんや坂本さんのアルバムは、それぞれ独自性はあるものの大きさはワールド・ミュージックと言ってしまう作品でしたが、あなたの場合は？

○僕もそれらの作品はよく聴いているんですけど、このアルバムでは極力避けましたね(笑)。ただ、どうしても出てきちゃう部分があつた(笑)。通常のロックっていう形態のリズムをとるのが嫌だとかそういう部分に。メロディも、やればよかったんですけどやっぱり避けましたね、極力。誤解を生むだろうなって思ったんで。

●最後に、このアルバムの正しい聴き方・捉え方をひとつ披露して下さい。

○いや、さっきも言ったように多大な誤解を生むところが大事なんで、あまり言いたくないんです。聴いた感じでとってくればいいんです。ただテーマはポジティブなんですよ。で、基本は絶望なんです。けどどこから何とか前向きにいくっていう……最近は何となく青臭いと思うのが感動することは素直にするべきっていう考え方に変わったんでね。アイロニカルにならないように、シニカルになりすぎないように、泣きたい時は泣くべきだなんていう風に思っているんで、そういう部分を感じてもらえればいいなって思うんですけどね。